

伝統を超えるもの 九州派機関誌より

桜井孝身

造型という言葉が頭の芯にコビリついて、ただそれだけでさえ、重荷になっている我々の頭上に、伝統というものがおおいかぶさって来た。ちょうどそんな時に、毎日新聞(3・7・15)に、先般パリで開かれたロン=チボー国際音楽コンクールに、日本側から参加したピアニストについて、近衛秀麿氏は『バッハがひけなかった。つまり演奏に宗教感覚が欠けていた』と指摘し、また『技術の問題よりも、二人はバッハの前奏曲とフーガにおいて敬けんなふん囲気をつくり出すことが出来なかったところに致命的なハンディキャップがあった。他国の入賞者たちは、バッハの曲に敬けんな教會的ふん囲気をつくり出していただけでなく、全身から音楽を発散していた』と伝えている。要するにキリスト教の伝統を理解できず失格したわけである。日本では、キリストに取材した絵を描けば、割引して見られるような状況で、ヨーロッパ的な教養としてでなければ、認めることが出来ないということは、なんとという定見のなさであろう。

それに反して、岡本太郎が、縄文土器をはじめ、光琳から芸術風土記まで、きわめてエネルギーに、日本の伝統を、具体的に持ち出してくれる才能と努力は、この上もなく有難いことだが、それを、真正面から受け止めるとなると、受止める側の我々が、きわめて不安定で、タシロがざるを得ない有様である。というのは、我々は戦後派であって、歴史というものを知らず、第一、そんなおめでたい人種ではないために、古いものに親しみがなく、結局は感動が湧いて来ないのである。我々が、岡本太郎に魅力を感じるのは、歯切れの良い文章と、案外、効果的にクローズアップされた写真の面白さを出ないのだ。かえつて、日本的なものより、ギリシャ的なものの方に、親しみと理解を持つ、といえどどうであろうか。

とにかく、縄文土器の歴史的な背景、言葉を変えれば、それについての解説(知識)は、日本(東洋)のものより、西洋のものの方が、我々の頭の中では、量、質ともに優秀、かつ量が豊富である。それは、戦後十二年、アメリカ州になろうかという戦後の日本で、青春を過している我々にとっては、決定的に、アチラさまでも、コチラさまでもない状態になるのは、不思議なことでもあるまいということだ。だからといって、どちらの伝統文明からも拒絶されていい筈はないが、結果的に拒絶されれば、現実的に、個人にとって非常に不幸なことになる。だから…今更という気もすると同時に、かえつて、拒絶されたことを良いことにして、伝統なんて『不必要だ』と開きなおることの方が、我々の性には会っているかも知れない。ここで我々若い者は、伝統より、もっとスケールの大きい、しかも魅力のあるものはないかと模索して見るのだが、問題は、そう簡単でなく、おいそれとは、なかなか見つけることができないのである。

安易といえば安易だが、我々はここでもう一度、クレーを持出す 必要があるのではあるまいか。それも、クレーが偉大だとか、好きだとかいうことではなく、誰でもが、世界の何処かで、単純に驚いているように、彼は、水族館の魚に驚いたのである。ただそれだけの事実を取りあげれば良いと思う。

その点人間は共存者としての魚、あるいはカメレオンをはじめ、 奇怪な形の生物に対して恐怖を抱いているが、それほど歪められた形、色でありながら、なおかつ生きる奇怪な生物たち。ただそれだけで、我々若い者は、いま流行のイヤラシイ絵などよりも、ズッと芸術的な身ぶるいを感じるのである。

生物の世界では、縄文土器のあの喰い込んだ模様も、光琳、宗教でさえもが、おかしな存在となってしまうほどの厳格さと、必然性が、生存というきびしい規律によって支えられているのである。生物の世界では、それらのひとつひとつが、醜悪であったり、優美であったりして生きている。それはもはや、カソリックの厳格さなどの比ではない。だからこそ、我々は、ヨーロッパにだけしかないものとか、日本的という偏頗な独占された伝統(それらを理解するには、わざとらしい教育を要し、なによりも、モッタイブツた用心深さと、忍耐が要求される)と、厄介な伝統の相続者たることを、何のみれんもなく捨て去り、世界中どこにでもコロガって生存し、しかも一カ国だけが一人占めにすることの出来ない物—今までと全然異なった存在としての人間を、人間としての自分自身を、物として、または極小の分子に分解して、原子の神秘性を探ぐるか、素朴に感激するということが、伝統よりもっと必要であり、戦後派として進むべき道ではないであろうか。

我々は、全く異なった生存の場を無理に設定して、大きな仮定でもって、絵そのもの、人間そのものを大きく切り開き、あるがままの自然ではなく、まさにこうあるべきだと、必然的に、きわめて人為的に、突然変異を試みなければならない。それが無意識に終るとしても、そうせざるを得ない情熱があれば、或は情熱はなくとも、生れようと欲せずして生れいずる人間や、動物たちのように、好むと好まざるとによらず、過程を通すということが種族を決定する。ともあれ、我々は、ガムシャラにヤッテシマエバヨイノデア